

研究会・部会・ 委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
食品安全研究会					
食品微生物研究部会	食品産業会が抱える食品微生物関連の共通課題を、部会員が協同で(企業の枠を超えて)研究し解決を目指す。食品関連企業の微生物担当者が業務上の悩みや課題を相談・共有し相互解決できる場として機能する。当部会の研究成果を含む食品微生物に関する安全性等の情報について、広く周知活動を行う。	部会員が集まり定期的に交流や情報交換を行える場としての部会運営の再整備(アフターコロナ対応としての集まる場の整備)新規研究PJの立案および他機関との積極的な連携の実施	<p>【全体】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ILSI Japan/NITE 合同シンポジウムの開催に向けた各種準備作業を実施。</li> </ul> <p>【分科会活動】</p> <p>(1) 芽胞菌研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>飲料の危害微生物に関する分科会メンバー間の情報交換会を1/12に実施。次回は4月中に開催予定。</li> </ul> <p>(2) MALDI-TOF MS 研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>NITE との連携協定に基づき、MALDI用解析ツールであるMass-Upの勉強会を開催した(1/17)。ILSI から8社16名、NITE から5名参加があり、Mass-Upを用いたMALDIスペクトルの実践的な解析事例を交えて議論、情報共有した。</li> </ul> <p>(3) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日缶協で実施中の追加試験の進捗共有、結果公表までのスケジュールについての協議のため、メンバーおよび日缶協でWeb会議を開催(2/29)。結果</li> </ul>	各分科会の研究活動に加え、各社が共通に抱える食品微生物関連の課題について、部会全体でのディスカッションおよび関連団体等との連携を通じ、課題抽出と解決策の検討を行う。	(公社)日本缶詰びん詰レトルト食品協会(日缶協) (独)製品評価技術基盤機構(NITE)

			<p>公表までの期間中、定期的に情報交換会を開催する方針を決定。</p> <p>b. 耐熱性試験法検証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動なし（検証試験の对外発表に向け、結果を取り纏め中）。</li> </ul> <p>(4) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。</li> </ul> <p>FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods"</p>		
食品リスク研究部会	食品の安全性評価の考え方を学び、その普及に努める。	<p>① 食品リスク研究に関する勉強会を3回以上開催し、情報発信する。</p> <p>② 「ナチュラルミステイク」の情報発信。</p>	<p>2月21日に部会をハイブリッド開催した。</p> <p>① 今年の勉強会も昨年同様3回を目途に有志によるWGを形成して企画運営する。</p> <p>② 「ナチュラルミステイク」については監訳者のインタビュー記事掲載により、12月の売り上げが急拡大したため、対応を一時中断する。</p>	<p>① 勉強会開催に向けて、企画・準備を進める。</p> <p>② 今後の売れ行きを注視して再検討する。</p>	
香料研究部会	食品香料の性質と安全性等に関し偏向の無い科学的な調査研究を行う。食品香料に関する正しい科学的共通理解を産・官・学	—	—	—	—

	に普及させる。				
食品領域の動物実験代替推進プロジェクト (AAT プロジェクト)					
全体進捗	<p>&lt;活動目的&gt;</p> <p>1) 動物に依存しない、毒性発現機序に基づいた、ヒトへの予測性のより高い評価アプローチを確立し、食品の安全性および機能性評価の精緻化・効率化を進展させること。</p> <p>2) 動物愛護の世界的潮流の中で食品領域の取り組みを加速させること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究 WG テーマ推進による評価技術基盤並びに評価戦略構築とケースレポートの作成。</li> <li>情報収集・発信 (国際ワークショップ内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>プロジェクトの今後の活動方向性等に関する議論を目的に、コアメンバー会議を開催 (1/26)</li> <li>プロジェクトのアカデミア委員 (国衛研平林容子先生、小島肇先生) への活動報告会議を開催 (2/5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3/15 にプロジェクト全体会議を開催予定 (外部会議室 (森下) &amp; Web)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国立医薬品食品衛生研究所 (国衛研)、独立行政法人 製品評価技術基盤機構 (NITE)、アカデミア等の専門家</li> <li>関連学会 (日本動物実験代替法学会等)</li> <li>ヨーロッパ、アジア等の ILSI 支部</li> </ul>
体内暴露予測ワーキンググループ (WG)	食品成分の体内曝露を、動物を用いずに予測する手法の開発推進と現場実装	<ol style="list-style-type: none"> <li>昭和薬科大学山崎研に構築した in silico 動態予測モデルの実装</li> <li>新規腸管吸収予測ツールの適用性把握</li> <li>ケースレポート対象化合物の体内曝露予測</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>in silico 動態予測モデル活用のためのガイダンス (AAT メンバーに共有用) 作成を開始した。また、in silico 動態予測モデルを適用できる動態試験条件の明確化のため、既存文献の収集を進めた。</li> <li>in silico 動態予測モデル活用の課題と解決アプローチについて協議した。</li> <li>進捗なし。</li> </ol>	<p>2024 年上期 : in silico 動態予測モデル活用のためのガイダンスの作成</p> <p>2024 年下期 : in silico 動態予測モデルの論文化検討</p>	

<p>データベース WG</p>	<p>食品成分の既存毒性情報(文献等)を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。</p>	<p>有害性評価支援システム統合プラットフォーム (HESS) を用いた食品成分毒性試験データベース及び使用ガイダンスを含む毒性予測手法の AAT 参画メンバーへの公開</p>	<p>昨年までに構築した食品成分の毒性試験データベース (176 種) の有用性検証を目的に Read-across の予測結果と原著論文を用いて POD やターゲット臓器の予測の妥当性検証を 6 月までに実施。本検証から得られた知見を HESS の利用ガイドとして活用できるよう、事例集及びコンセプトシートを作成。12 月の全体会議にて合わせて 176 種のデータベースの公開をもって本 WG の活動を一旦完了とすることで合意した。データベースの HESS への登録や知財の課題について、HESS を管理している独立行政法人 製品評価技術基盤機構 (NITE) と相談を実施。</p>	<p>データベースの公開に向け、改めて知財の課題について対応する (有償文献由来のデータ数の把握、データベースの順次登録検討等)。</p>	
<p>ケースレポート WG</p>	<p>NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略を具体化させ、体内曝露予測 WG とデータベース WG の活動と協力し、in vitro assay 系を加えたリスク評価戦略を作成し、ケースレポートとして発信する。</p>	<p>第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとし、ラット肝細胞を用いた試験から in vitro PoD を求め、評価スキームの妥当性を検証する。</p>	<p>ラット肝細胞を用いた文献報告を利用し、BMD 法 (EPA モデル) にて BMDL (95%信頼限界下限値) を推定 (in vitro PoD)。ラット短期反復投与試験報告の肝障害に対する BMDL から曝露濃度予測値を算出 (in vivo PoD)。BMD 解析法における課題を抽出すると共に、in vitro および in vivo PoD を比較することで、設定した評価戦略の妥当性を検証中。サンプルの平均値に左右され、サンプル数によって推定値が変化する</p>	<p>Bayesian BMD (EFSA モデル) を用いた検討を進めると共に、BMD 評価手法の有用性確認の検討を、外部専門家と連携しながら進める。BMD 評価手法の検討では、対象成分を食品に限らず、既存化合物にまで広げて実施することで評価実績を積み重ね、評価手法の有用性を確認する。</p>	

			BMDに代え、分布を利用して確率変数を求める「ベイズモデル平均化法」が今後主流になるとの意見を受け、Bayesian BMD (EFSA モデル) を用いた検討を開始。		
企画運営 WG (国際ワークショップ & シンポジウム WG より変更)	動物実験代替法における各国の技術・規制動向に関する情報を発信することにより、食品業界における代替法の開発や取り組みの推進を促す。	評価技術に関する情報を収集しプロジェクト内へ共有すると共に、プロジェクトの活動内容を学会やワークショップ等を通じて発信する。	食品の機能性評価における動物実験代替法の活用について、専門家の先生による講演会を企画している。第1回目の講演会は、熊本大学の首藤先生による「機能性食品開発に資する有用植物探索ツールと C エレガンス健康寿命評価技術」と題し、森下文化センターを主会場とした zoom でのハイブリッド方式で 2024 年 3 月 19 日に開催予定。参加者は AAT プロジェクト参画企業所属の方。また、食品安全委員会による講演会/勉強会の実現へ向けて、テーマや形式を明確化するためにプロジェクトメンバーに対するアンケートを実施した。結果を集計して本取り組みを具体化していく。		
<b>研究会・部会・委員会・分科会</b>	<b>活動ビジョン・ゴール</b>	<b>年度目標</b>	<b>進捗・課題</b>	<b>予定・行動計画</b>	<b>関連団体等</b>
バイオテクノロジー研究会	バイオテクノロジーを用いた持続可能な食料の安定供給への貢献を念頭に、バイオ	1. 「植物バイオテクノロジー調査報告(旧「ERA プロジェクト調査	・期間中に研究会は開催なし(新年度1回目は3月開催予定) ・2023年12月開催高度精製WSの開催概要を機関誌「イルシー」	・「植物バイオテクノロジー調査報告」No. 66のレビュー、発行、配布、送付先の見直し。 ・組換えナタネ論文原稿の最終	農林水産省 厚生労働省 内閣府食品安全委員会 環境省

	<p>テクノロジーの重要性の理解を深め、バイオテクノロジー応用食品・作物・添加物等の安全性・活用に関する調査研究と情報提供を産・学・官連携及び国際的ネットワークを通して推進し、科学的根拠に基づく国際的に調和した安全性評価法や活用法の発展に貢献する。</p>	<p>報告) (年4回)  2. バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品・食品添加物等の安全性に関するワークショップ  3. 第16回 ISBR (International Society for Biosafety Research) 2023 への安全性評価の専門家の派遣  4. 遺伝子組換えタネの ERA に関する研究成果の論文発表</p>	<p>No.158 に投稿するべく、初稿を演者に確認いただき、ILSI Japan 事務局編集委員会へ送付。  ・ ISBR DT パラレルセッション概要の論文が掲載された。  ・ 「植物バイオテクノロジー調査報告」 No.66 の発行に向けてスタート、原稿が集まった。</p>	<p>化、投稿。</p>	<p>文部科学省  経済産業省  筑波大学環境系 &amp; つくば機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC)  明治大学農学部  国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 (農研機構) 作物研究部門  横浜国立大学大学院環境情報研究院  千葉大学大学院園芸学部</p>
--	--	--	---	--------------	---

栄養健康研究会

<p>栄養研究部会</p>	<p>「健康寿命延伸」はグローバルな持続可能な開発目標 SDGs の目標3「すべての人に健康と福祉を」に合致することから、「健康寿命延伸」をキーワードとした活動を継続</p>	<p>「健康長寿延伸」のための最新のエビデンスを継続して発信していく。  ● 公開セミナー(有料)を Zoom ミーティングで1年に数回開催する。</p>	<p>2023年からは、活動テーマを「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは」とし、「世代別の健康と栄養」に関する公開セミナーをシリーズ化して開催する。  進捗は、以下の通り。  ① 部会を開催し、第4回公開セミナー (2024年6月 Zoom 開催) ま</p>	<p>実績は、以下の通り。  ● 第3回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：中高年期編」を2月16日(金)に開催 (Zoom)。  ● 参加登録数：95名 (一般企業、大学、学校、医療機関等の非会</p>	
---------------	---	---	---	--	--

	する。	●セミナー参加登録者に対しては、オンデマンド配信を実施する。	でのスケジュールと今後の活動について検討した(2/29)。 ●第4回セミナーの候補日(仮)を6/19とし、講師の先生方に打診することにした。 ●セミナー開催当日の担当(Zoomホスト、共有ホスト、画面共有、司会などの担当)を割り当てた。 ●今後については、4月の部会で改めて検討することにした。	員および ILSI Japan 会員企業) ●参加登録者へのオンデマンド配信開始:2024年2月28日(水)~2024年3月28日(木) 計画は、以下の通り。 第4回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは:老年期編」を2024年6月に開催予定(日程調整中)。	
GR プロジェクト	食品・食事の血糖応答性の簡易評価法(GR法)の確立と普及	GR法の確立・発表論文発表	論文再投稿準備 GR法詳細条件の検討	論文発表 GR法に関する討論会の開催	
茶類研究部会・茶情報分科会	茶樹に係わりその成分の世界的な多様さ、飲料その他商品に係わり各種茶成分の機能性、研究・開発・商品化等につき会員相互間の情報交換を深めると共に、外部からも情報を得る。	—	—	—	—
CHP (Center for Health Promotion)					
Project PAN (Physical Activity and Nutrition) “身体活動と栄養”プロジェクト	超高齢化が進む国内において、働きざかりの人々や高齢者の健康維持を支援する、運	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ ヘルシーエイジングのためのプログラムの開発・普及</li> <li>➤ 介護予防教室</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 2023年度「すみだテイクテン教室」委託事業報告書作成</li> <li>2023年度「すみだテイクテン教室」の概要とその効果につ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 論文投稿準備</li> <li>➤ ホームページリニューアル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 石巻専修大学</li> <li>✓ 鹿児島大学</li> <li>✓ 島根大学</li> <li>✓ 札幌医科大学</li> </ul>

	動と栄養の複合プログラムの開発と実践	<p>の開催（自治体、社会福祉協議会、企業）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 地域リーダーの育成（大学、社会福祉協議会、シルバー人材センター）</li> <li>➤ 論文等、科学的成果の発信</li> </ul>	<p>いて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ すみだテイクテン自主グループ支援 教室終了後の新規グループの立ち上げと既存グループへの支援</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 東京都健康長寿医療センター研究所</li> <li>✓ 国立健康長寿医療センター</li> <li>✓ 墨田区</li> <li>✓ 横浜市社会福祉協議会</li> <li>✓ 岩国市社会福祉協議会</li> <li>✓ 吉賀町社会福祉協議会</li> <li>✓ 津和野町シルバー人材センター</li> <li>✓ 益田市シルバー人材センター</li> </ul>
Project DIET (Dietary Improvement and Education with TAKE 10!®) “途上国栄養改善と栄養教育”プロジェクト	途上国、新興国における官民連携の栄養改善の取組み「栄養改善事業推進プラットフォーム」(NJPPP) のプロジェクトとして、工場など職場の栄養改善プロジェクトを東南アジア各国で推進。	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ <b>フィリピン：</b>「フィリピンの栄養強化米プロジェクト2022（調査研究）」2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 本年度プロジェクト立案無し</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ Food and Nutrition Research Institute (FNRI：フィリピン食品栄養研究所)</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ <b>ベトナム：</b>「ベトナムにおける野菜の摂取</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 本年度プロジェクト立案無し</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ National Institute of Nutrition (ベトナム栄養研究所)</li> </ul>



		<p>行動に影響を与える要因調査」ビジネスモデル構築、並びに 2024 年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。</p>			
		<p>➤ ミャンマー：「完全オンラインによるブロックチェーン技術を応用した職場における栄養教育」栄養教育推進に焦点を当てたビジネスモデル構築に向けた展開を計画。</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト立案無し</p>		<p>National Institute of Nutrition</p>
		<p>➤ インドネシア：「インドネシアにおける健康的な食事の普及に関する調査 2022」ビジネスモデル構築、並び</p>	<p>➤ 1回/月のペースで Web 会議を実施し、ビジネスモデル構築に向けたポイントについて協議</p> <p>(1) 提供する製品形態 (2) 食事摂取推奨量（主要栄養素） (3) 健康的な食事の基準 (4) 質問票の内容（消費者の購買意</p>	<p>➤ Web 会議を通じてプロジェクトのフォローを継続</p>	<p>✓ ボゴール農科大学（現 IPB Univ.）</p>

		に2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。	欲を高める手法、建前の正解ではなく本質を聞き出す方法 (5) Take10 Sheet の使用		
CHP 全体	日本の産・官・学界に蓄積された栄養学、医学、公衆衛生、衛生環境等の分野における科学的知識および技術を、国内および世界的に共通な課題の解決に活用し、SDGs に基づいた社会貢献を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ SUN Business Network Japan (仮称: SBNJ) 事務局機能誘致に向けた活動継続。</li> <li>➤ SDGs 貢献プラットフォームの形成。</li> </ul>	➤ SBN 本部とのセミナー開催に向けた打合せを実施 (1/31)	➤ セミナー開催後の ILSI Japan の役割具体化を目指す	✓ SUN Business Network Indonesia
研究会・部会・委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
国際協力委員会	アジアの ILSI 各支部間の交流による食品法規動向及びリスク評価等の情報収集・共有化と ILSI Japan 関係者への成果報告	10月26-27日開催予定の Asia Sciences Institutes Network (ALSIN) 会議(アジア地域 ILSI 支部との情報交換会)への参加、情報交換	<進捗> ・「イルシー」誌投稿: 日本講演者の原稿は投稿終了。海外演者講演内容につき原稿作成中。 <課題> ・「イルシー」誌への投稿完了	次回委員会にて今年度の活動計画を審議予定。4月中の開催を予定。	アジア各支部
食品機能性研究会・AI 栄養・機能性研究部会					
AI 栄養機能プロジェクト分	実生活から創出される莫大な量のリアル	・フレイル予測モデル論文化	○ 月次運営会議 (1月)、(2月) を実施し、プロジェクト全体の進捗確	○ 第1期の活動総括 ○ AI 栄養機能プロジェクト、AI	国立健康・栄養研究所 (健栄研)

科会	ワールドデータについて、最新のデータサイエンスおよび AI 技術を活用し、様々な生活習慣と健康との関係性を解明することで、一人ひとりに適した情報提供を可能とする AI システムを構築する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フレイルナレッジグラフ作成</li> <li>・ナレッジグラフスキル（育成）</li> <li>・北大阪健康医療都市（健都）での発信</li> </ul>	<p>認、課題・スケジュールを確認、更新。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○和食 WG：和食に着目してコホートデータ解析。</li> <li>○予測モデル WG：論文執筆中。</li> <li>○フレイルナレッジグラフスキル WG：生成 AI を連動した高度な処理スキルの紹介とトライアル。</li> </ul>	ディアトロフィ合同報告会	
AI ディアトロフィ研究部門分科会	数千分子種よりなる食品摂取によるヒトの代謝状態を最新のコンピュータ技術と計算科学を活用し、高速で安価に食の機能性・安全性を予測する AI システムを構築する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・代謝モデルの領域拡大</li> <li>・機能伝達経路のイジングモデル</li> <li>・AI 教育</li> </ul>	1月22日に月例の進捗報告会を実施し、代謝のモデル化に関する進捗状況の報告がなされた。また、今後の AI リテラシー教育のなかで実習に使用予定とされているソフトウェア開発キットのインストールに関する説明があった。	AI 栄養・機能性研究部会第 1 期報告会が 3 月 5 日に開催されており、AI 栄養機能プロジェクト分科会との合同で成果と総括について発表予定。	<p>東北大学未来科学技術共同研究センター （NICHe：New Industry Creation Hatchery Center, NICHe） 東北大学大学院農学研究科</p>
情報委員会・編集部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査・研究活動とその成果の発表</li> <li>・科学情報の普及</li> <li>・国内外の関連機関との交流・連携</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 活動報告配信（年 6 回）</li> <li>2. 機関誌「イルシー」の発行（年 4 回）</li> <li>3. 「栄養学レビュー」誌の発刊（年 4 回）（女子栄養大学出版）</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 活動報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2023 年 11, 12 月分配信（1 月）。</li> </ul> </li> <li>2. 「イルシー」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 157 号：発行、ホームページ掲載、お知らせメール配信（2/8）</li> <li>・ 158 号：編集中（2024 年 5 月発行予定）</li> <li>・ 5 年経過号のパスワード解除 2018 年発行号（133～136 号）をパ</li> </ul> </li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 部会活動報告の配信（1 月、3 月、5 月、7 月、9 月、11 月）</li> <li>2. 機関誌「イルシー」の発行（2 月、5 月、8 月、11 月）</li> <li>3. 「栄養学レビュー」誌の発刊（2 月、5 月、8 月、11 月）</li> </ol>	

		部との共同事業) 4. 種々出版物発刊のコーディネーター	スワードフリーで閲覧できるように修正。 3. 「栄養学レビュー」誌 ・ 123号：編集中（2024年2月発行予定のところ Oxford University Press との契約更改遅延につき未発行） ・ 124号：編集中（2024年5月発行予定） ・ 125号：編集中（2024年8月発行予定）		
--	--	---------------------------------	--	--	--

【事務局からのお知らせ】

理事会	<p>第1回理事会が令和6年2月7日（水）に開催された。</p> <p>1. 令和6年通常総会審議事項・報告事項</p> <p>審議事項</p> <p>1) 2023年事業活動報告及び決算報告書承認の件 山口事務局長が各研究会、研究部会ごとに事業活動の報告をし、続けて俵積田次長が決算の概要を資料に基づき説明した。 山田監事より、2023年決算に関して監査の結果、決算が妥当であると報告があった。</p> <p>2) 2024年事業活動報告及び収支予算書承認の件 事務局長が各研究会、研究部会ごとに事業活動の計画を報告し、同上次長が収支予算の概要と会費値上げ案を資料に基づき説明した。</p> <p>3) ILSI Japan への CHP 統合 審議事項 1) は異議なく承認された。 審議事項 2) については、ILSI Japan と CHP の収支を分けて説明すること、会費値上げ案は検討不足との理由で総会に提案することが却下された。 審議事項 3) は却下され、総会決議が必要な案件が発生した場合、迅速に総会を開催できるよう、Web 開催など開催方法の変更案を提案することが決議された。</p> <p>報告事項</p>
-----	--

	<p>本部動向</p> <p>事務局長から、ILSI 論文の題材として、一番多いのはニュートリションであると説明した。</p> <p>本部の 2024 年の総会でのセッション内容や今後の ILSI のターゲットについて説明した。</p> <p>2. 決議事項</p> <p>改選理事の承認</p> <p>事務局長から重任理事、新任理事、退任理事に関して説明があり、満場一致で承認された。改選理事はその場で全員承諾した。</p> <p>第 2 回理事会が令和 6 年 2 月 25 日（日）に開催された。</p> <p>改選理事が出席し互選の結果、引続き宮澤理事が理事長に選任され、その場で承諾した。他に副理事長に桑田理事、中江理事、谷口理事、阿部理事が選任され、その場で承諾した。理事長代行者を桑田副理事長とすることが決議された。会長職はアカデミア出身の理事長が選任されたので、空席とすることが決議された。</p>
総会	<p>令和 6 年通常総会が 2 月 20 日（火）午前 10 時より江東区森下文化センター内会議室において開催された。</p> <p>正会員総数 50 名のうち総会出席数 15 名、書面表決 30 名であった。</p> <p>議長が正会員より 1 名選任され、以下議事を進めた。</p> <p>1. 審議事項</p> <p>第 1 号議案 2023 年度事業活動報告及び決算報告案が承認された。</p> <p>第 2 号議案 2024 年度事業活動計画及び収支予算案が承認された。</p> <p>第 3 号議案 定款変更（総会開催方法の変更）</p> <p>質疑はなし。</p> <p>2. 報告事項</p> <p>本部動向の説明</p> <p>事務局長が ILSI グローバルの論文の題材を多い順にまとめた資料について説明した。また 1 月に開催された年次総会のセッションの題名や、どのようなターゲットを目的としているかを説明した。</p>
事務局	